

若い教師のために④ 問いをもつ

学力研常任委員 深沢 英雄

一、「訊き上手」から「問いもち上手」へ

「訊く」とは分らないこと尋ねることです。「問い」をもつとは、より能動的に「自分の頭で多くのことを考える」ことです。「問う」という行為は「考える」ということへの入口です。

大学の時に卒論やゼミで「問い」を立てるといった経験をしたと思います。しかし、育ってきた学校において、「問い」よりも「答え」を求められてきた経験の方が多いのではないのでしょうか。

学級経営や授業では、「問いをもつこと」「それに対する答えを導き出すこと」「それを修正していくこと」が常に求められます。教師は「発問」をします。教師は「問う」側なのです。

二、「教材への問い

授業で一番大事なことは、子どもたちに

「はてな?」「なぜ」をどうもたせるのかということ。」「はてな?」を掘り起こすものになる。「好奇心」を大切にするのです。

それには、まず教師が教材の中に「どうして?なぜ?」を見つけないといけません。教科書はよくできていて、読んでいると納得してしまいます。子どもに分かりやすいように書かれているから、どこに疑問点があるのか、一度読んだだけでは、見つけられないのは、若い先生にとつて当たり前のことです。「分かりきっている」と思ってしまいません。でも、「問い」続けていくことで少しずつ「はてな?どうして?」が見えてきます。国語の教材を読むと、だいたい分かってしまう気がします。どこに考えるところがあるのと思ってしまう。

作家の平野啓一郎さんは、「本の読み方 スロー・リーディングの実践」の中でこう

言われています。

『書き手の仕掛けや工夫を見落とさないというところから始めなければならぬ。本を読んでいると「どうしてこんなことが書いてあるのだろうか?と疑問に思う部分がある。良書には、どんなものにも謎がある。とにかく、大切なのは立ち止まって、「どうして?」と考えてみることだ。たとえば、作者の思いや考えが凝縮されている詩などは「なぜ?」という疑問を抱かなければ、永遠に「意味不明」で終わってしまうだろう。』なぜ、わざわざ作者はこんな書き方をしているのだろうか?なぜ、あえてこんなことを書いているのだろうか?と考えるところから始めなければならない。会話の中で、聴く気のない相手に対して、人が「この人に話かけてもしかたない」とそっぽを向いてしまうように「なぜ?」という疑問を持たない人には、本は永遠に口を閉ざしてしまっだろう』

先月の学力研の広場で久保先生が「こんぎつね」の教材分析を書かれました。その中に「ヒント」があります。

『この場面の授業で「なぜ気づかないの

だろう」と問いかけ、ごんは取り巻く状況を考えさせることが大切です」と。もう一度じっくりと読み直してみてもうどうでしょうか。

二、子どもの行動に「問い」をもつ

授業での教材分析だけでなく「問い」をもつことを意識する場面があります。子どもの行動を観察していて、教師は「なぜだろう」「どうして、あのようなことをしたのだろう」と思うことがあります。学習の時間のことを例にしてみましょう。

二十年ほど前に、四年生を教えています。算数の最初に百ます計算をしていました。「よいい。どん。」ストップウォッチを持って子どもの様子をみていました。クラスには、カリカリという音しか聞こえませんでした。

ある女の子の様子が気になりました。一生懸命に計算していますが、鉛筆を持っている側の肩を時々あげるので、他の子は肩をあげません。「肩でも凝っているのかな」と思いましたが、規則的にあげるので、「なぜだろう？どうして肩をあげるのだろうか？」彼女の近くにさりげなく寄って、

百ますをする様子を細かく見ていました。百ます計算は、上と左に問題が書いてあり、上と左の交差点に答えを書きます。

左の問題が0とか1だと肩をあげることなく、スーと問題を解いていきます。でも、7とか8という難しい問題になるといちいち肩をあげるので。

問題が難しいと時間がかかります。そうすると問題の数字を確認するために、左側の問題をみる必要があります。

この女の子は「左きき」だったので、左の腕で問題が見えないので、肩をあげて左側の問題を見ていたのです。

家に帰って、明日行う百ます計算に工夫を加えました。左側にある問題を右側にも書き足しました。

次の日、そのプリントを彼女に渡ししました。「右にも問題が書いてあるから、左腕で問題が隠れることがないからね。」と右に問題が書いている理由を説明しました。

「どんなタイムと正確さに今日の百ます計算はなるのだろうか。」とドキドキしながら見ていました。

結果は、昨日より、三十秒以上速くなり

ました。点数も上がっていました。その時の彼女の笑顔はいまでも思い描くことができます。

退職間際に二年生を受け持ちました。四月にたし算とひき算の横算の百問プリントを全員にさせました。一年生の計算がどれだけ定着しているか調べてみました。田中君（仮名）は、たし算は九五点。ひき算は五六点でした。特に、繰り下がりのひき算が苦手でした。繰り上がりのたし算はできていましたが、時間がとてもかかっていました。四月の最初は、百ますたし算から練習を開始しました。より正確にすばやくできることを目指しました。

田中さんは、百ますたし算になると間違いが多くなりました。六十点ほどしか正答しません。田中さんの百ます計算の丸つけをしていると上半分はすべて正解していますが、下半分がほとんど間違っています。田中さんが計算をしている様子を見ると、目が動いていないのです。そこで、真ん中に、上の数字を書いてみました。すると次の日、九六点をとりました。子どもの行動を「問い」を持って観察した結果です。